

旬花報



同窓会長
野村留美子

12号

平成26年3月31日
発行

群馬県立女子大学
同窓会事務局

370-1193 佐波郡玉村町上之手1395-1
TEL:0270-65-8511
URL:<http://shiou-kai.com/>

5時間の間に来てくださった方は86名。大学の先生、お子さんを連れた卒業生、県女に進学を希望している高校生とその保護者、他大学の学生、そして模擬店の休憩時間に来てくださった現役学生など。席が空かないために廊下のソファで待つてくださった方もいてなかなか盛況だったのではないかと思います。

飲み物はコーヒー、紅茶、こだわりのハーブティー3種（ローズ、カシス、アツップルジンジャー）をお出ししましたが、ハーブティーが大好評でした。

折しも錦野祭のテーマは、「ぐんまる？」
毎年、学生活動支援金として、錦野祭実行委員会に資金援助をしていますが、同窓会が直接参加するのは初めてのことです。

そこで、錦野祭2日目にあたる11月4日（月）、10時から15時までの5時間という短い時間ではありますが、「同窓会カフェ」を開くことを決定しました。

開催にあたっては次のことに気を付けました。

○卒業生や現役学生に気軽に立ち寄つていただける明るい雰囲気のカフェにすること。

○飲み物やお菓子は無料で提供しますが、こだわりのあるものをお出しすること。

○働く卒業生を応援するために職場のチラシやポスターなどを募って、カフェに置くこと。

○作家や漫画家として活躍している卒業生の作品を集めて展示し、来場者に紹介すること。

当日は晴天で風もなく穏やかな日でした。

会場は学生会館2階の同窓会室を開設しました。長机4台と椅子12脚置いたらいっぱいになってしまった狭いスペースですが、飾り付けに奮闘しました。

卒業後も同窓会員として同窓会活動にご協力、ご参加いただいている現役学生のうちから同窓会のことを良く知っていたら必要があると常々感じておりました。もっと同窓会をアピールする方法はないですか。

同窓生の皆様、いかがお過ごしでしょうか。
同窓会・紫桜会が発足して今年で16年目。
旬花報のお届けも12号目となりました。
今回は、私たち同窓会役員の新しい試みである「同窓会カフェ」についてご紹介します。

同窓会・紫桜会が発足して今年で16年目。旬花報のお届けも12号目となりました。今回は、私たち同窓会役員の新しい試みである「同窓会カフェ」についてご紹

美学美術史学科4年・小林美緒さん
前橋市ミニバイクなどを対象にしたご当地ナンバープレートのデザイン募集で最優秀賞を受賞。彼女のデザインしたプレートはすでに採用され、1月15日より前橋市役所などで公布されている。

国際コミュニケーション学部4年・金沢小夢紀さん
全国学生英語プレゼンテーションコンテストで最高賞の文部科学大臣賞を受賞。

最近の県立女子大生の活躍は目覚ましく、新聞等で大きく取り上げられるようになりました。平成25年度の輝かしい成果をここにご報告いたします。

活躍する学生たち



手作りのアクセサリーも並べました。

・アロハダンスサークル部員
国際コミュニケーション学部4年・前田舞さん
(全国カレッジフラ・コンペティション部優勝)

・アロハダンスサークル
(全国カレッジフラ・コンペティション団体優勝)

国際コミュニケーション学部4年・金沢小夢紀さん

全国学生英語プレゼンテーションコンテストで最高賞の文部科学大臣賞を受賞。



「玉村の、しかも女子大を舞台にした映画を作るらしい。」

そんな情報が役員会で話題になつたのが、2013年の年明けでした。

玉村町を舞台に、市民有志が制作委員会を組織し、全編ロケ映画を制作しました。監督の藤橋誠さんは、専門学校の講師をしながら地域密着型の作品を撮っている方で、これまで群馬県千代田町を舞台にした『あおとんぼ』、鬼石地区を舞台にした『しゃんしゃんしゃんしゃんしゃんしゃん』、群馬県を連携した『サドル184ペダル∞』などを作つていらっしゃいます。

今回の作品『漂泊』は、

県立女子大4年の女子学生が卒業論文と就職活動に追われる中、女優志望の妹とともに前に向かって進んでいくというストーリーです。出演者のほとんどはオーディションで選ばれた高校生や大学

「玉村の、しかも女子大を舞台にした映画を作るらしい。」

そんな情報が役員会で話題になつたのが、2013年の年明けでした。

映画の出演者に応募するきっかけは何ですか？

決意するまでに時間がかかったのです？

最初は出演者に応募するつもりはありませんでした。玉村在住の先輩が、先にスタッフに応募していたため、最初はスタッフに応募しました。その関係で、キャスト募集の説明会に参加したとき、監督の作品を映像で見て、押しがあって、応募することに決めました。

出演が決まったときは、どんな気持ちがしましたか？

キャストが決まるまで、オーディションを3回受けました。しかし、演技に自信がなく、人前で緊張する性格のため、「自分にとまるか」と不安でいっぱいになりました。

撮影に入る前に、演技指導2～3回、1泊2日で選ばれた高校生や大学生

生、社会人です。今回はこの映画の主人公を演じた国際コミュニケーション学部3年の秋山絵里夏さんのインタビューをお届けします。



映画『漂泊』

国際コミュニケーション学部3年
秋山絵里夏さん
インタビュー

日の合宿が1回ありました。監督さんの意向が素人の中から選んで、その成長の過程を見ていこうというものでしたので、質を落とさないようにがんばろうと感じました。

**撮影中の様子を教えて下さい。
楽しかったこと・良かったことはどんなことですか。**

撮影は玉村町内のいろいろな場所で行われました。私は、安中市から通っているので、玉村の町の様子はほとんど知りませんでした。今回の撮影では、神社・病院・河原・祭りのシーンも使われていて、今まで知らなかつた玉村の良さを知ることができました。また、玉村町役場の方の協力もあつたため、サーケルの用事で役場に行くと、役場の職員の方が「元気にしてる？」と声を掛けてくださることも増えました。町の伝統を知り、新しいきずなを結ぶことができたのは、貴重な経験になりました。来年は、友達を誘ってお祭りに行つてみたいです。

また、年が近い、県内の学生と大勢知り合うことができました。キャスト・スタッフとして、中央工科デザイン専門学校、高崎経済大学、前橋国際大学、東京福祉大学などから参加していました。知り合つた人たちに誘われ、まことにCITTYエフエム・MWaveのラジオ番組に出演したり、新たな活動に広げることができました。また「メディアキッチン in 群馬」（群馬の魅力を伝えるための映像を作る活動）に今後スタッフとして関わっていきたいと考えています。今まで、学外との関わりがほとんどなかつたので、自分の世界が広がつたと感じています。

友達や家族の反応はどうでしたか。

上映の時、家族や親戚はとても喜んでいました。友達も、作品の感想を言ってくれました。撮影を終えて変わったことはありますか。

まず、自分の世界が広がつたことです。

また、友達からは、「雰囲気が変わったね」と言われるようになりました。「明るく社交的になつたね。成長したね。」いうことだと思います。たくさんの方と関わり、舞台挨拶や記者会見、新聞社の取材を経験する中で、場慣れしてきたのだと思います。

このインタビューの時点では、Movix伊勢崎と女子大講堂での上演を終えた後でした。いつもは映画を見に行く空間に、自分の映像が流れていることに不思議な思いがした」と語ってくれました。

『漂泊』は、左記の日程で上演されました。

| | | |
|---------------|------------|------------|
| 4 / 6 (日) | Movix 伊勢崎 | 2 / 7 (金) |
| 高崎シティギヤラリー | 群馬県立女子大学講堂 | 2 / 1 (土) |
| コアホール (高崎映画祭) | 熊谷シネティアラ21 | 3 / 14 (金) |
| | | 3 / 8 (土) |
| | | 2 / 3 (月) |

大変だったことはどんなことですか。

主人公でセリフがたくさんあり、覚えるのは大変でしたが、それは楽しむことができました。



ただ、撮影が7月～8月だったため、とても暑かったです。

また、水神祭のシーンは、思い悩んで泣かなければいけなかつたのですが、周りで見ている方はお祭りためテンションが高く、集中して気持ちを作るのが大変でした。

紫桜賞

アロハダンスサークル

個人 前田 舞さん (国際コミュニケーション学部4年)

アロハダンスサークルは、全国カレッジフラ・コンペティションに参加し、団体優勝を果たしました。また、同部員の前田さんは、個人の部で優勝しました。

アロハダンスサークルは、今回初参加でいきなり団体・個人ともに優勝し日本一になりました。このコンペは、国内唯一の大学生のみの大会で、優勝後は、ハワイ州観光局が国内各地で開くイベントの出演依頼が相次いでいるそうです。各地で、群馬県立女子大学の名前をアピールしてきてほしいですね。



前田舞さん

アロハダンスサークル部員の梶林里美さんから感想をお寄せ頂きました

アロハダンスサークル部員

梶林 里美さん (国際コミュニケーション学部3年)

私がアロハダンスサークルに入部したきっかけは、入学式の時、先輩方のフラダンスで、これから新しい生活が始まるという不安な気持ちが穏やかな気持ちに変わった経験から、私も人に幸せを届けられるようなフラを踊りたいと思ったことです。

私たちは昨年7月末に2013 カレッジフラコンペティションに出場し、団体ではLokelani チーム優勝、個人では4年生の前田舞さんが優勝という大きな賞を頂くことができました。大会当日までの約4か月間、私たちはまるで家族のように、毎日顔を合わせ、フラの練習・食事を一緒にとり、ときには大会出場への不安を夜通し打ち明けあうなど大変濃い時間を過ごしました。練習を重ねるごとに周りの方への感謝の気持ちがあふれ、応援してくださる方の期待に応えたいという思いが強くなり、チーム全員の気持ちがより1つになり練習への熱が大きくなっていくのを感じました。そして大会当日、私たちは指導してくださった先生方はもちろん、支えてくれた家族、応援してくださるすべての人への感謝の気持ちだけを持ってステージに上がりました。踊った後は達成感や嬉しさなどからみんなで涙し、今までフラダンスを続けてきて本当に良かったと心から思いました。このような素晴らしい経験を積むことができ本当に幸せに思います。

大会を通して私たちはさらにフラを踊ることの素晴らしさを知り、今まで以上にチームワークもフラへの気持ちも大きくなっています。



定年を迎えるにあたつて

国際コミュニケーション学部教授・国際ビジネス課程

片桐庸夫



群馬県立女子大学OGの皆様、長きにわたりお世話になりました。「人間万事塞翁が馬」の例えがありますが、私は奉職期

すような病気入院や事故等にあうこともなく、

定年を迎えることになりました。

これで本学発足時の教員は一人もいなくなります。昭和55年に前橋高校の跡（現生涯学習センター）に開学以来、光陰矢のごとくに過ぎました。とはいっても最初の退学生となつた一期生のこと、交通事故で亡くなつた二期生のこと、ソフトボール公式戦で初勝利した時の感激等をひとつひとつ思い浮かべますと、矛盾するようですが結構長く勤務したという実感もあります。

個人的には、在外研究、内外での研究報告、学位（法学博士）の取得、論文・著書の執筆、吉田茂賞受賞、渋沢研究会の設立、学位審査、学会誌のレフリー等、研究者としてそれなりに充実した日々を送ることが出来ました。

学内的には、国際コミュニケーション学部長、大学院国際コミュニケーション研究科長を、社会的には日本国際文化学会やグローバル人材育成教育学会の理事、大学評議会委員等を勤めました。紳士録に名を連ねることも出来ました。また本学において長く付き合える多くの学生（今は友人です）に出会えたことは、教員としてとても幸せなことであると感謝しています。現在の心境は、入試や様々な会議等の職務がなくなるという解放感とこれから研究に専念出来るという嬉しさです。今後は、12年後の喜寿を迎えるまでの間に新書や編著書等3、4冊の本を出版することを目標に人生を楽しみたいと思います。「新研究室」も拙宅近くに設けました。思ひ出します。この皆様の跡を祈念します。

34年間の思い出

文学部総合教養学科教授 神山雄一郎



群馬県立女子大学は、1980（昭和55）年、全国で34番目の公立大として、関東では公立女子大第1号として開学した。

私もその末席に保健体育

の教員として名を連ねた。

開学はスムーズに運んだわけではなく、下水処理場との抱き合わせ案であったため、玉村住民の反対に遭い、やむなく前橋高校跡地での仮開校となつた。私としては思いもよらぬ母校での勤務となり、昔、自分が使つた体育施設を利用することになつた。私が最初に授業として行つた種目は、卓球、バレー、ボール、バスケットボール、バドミントンである。校内にはプールもあり、夏は水泳も取り入れた。

テニスは人気があり要望もあつたが、私はできなかつた。しかし、テニスの得意な岡本先生に師事し、真剣に取り組んだ。テニス部の学生も私の良きライバルであった。テニスを授業に取り入れることができたのは、玉村に校舎が移転した後である。

三十八年間大きな病気をすることもなく勤め人ならば誰にも等しく訪れる、人生の一通過点に過ぎない。とは云え三十八年となれば、それなりの感慨を抱くのは当然だろう。

その気持を一言で述べれば、ホツとしたと云うに尽きる。

三十八年間大きな病気をすることもなく勤め人ならば誰にも等しく訪れる、人生の一通過点に過ぎない。とは云え三十八年となれば、それなりの感慨を抱くのは当然だろう。

その気持を一言で述べれば、ホツとしたと云うに尽きる。

ホツとする

文学部美學美術史学科教授 柳原悟



本年三月二十一日定年を迎えた。本学に赴任したのは平成九年。都合十七年間の教育稼業である。

二十一年に及ぶ美術館勤務がある。それをも加えれば三十八年。定年は、勤め人ならば誰にも等しく訪れる、人生の一通過点に過ぎない。とは云え三十八年となれば、それなりの感慨を抱くのは当然だろう。

その気持を一言で述べれば、ホツとしたと云うに尽きる。

三十八年間大きな病気をすることもなく勤め人ならば誰にも等しく訪れる、人生の一通過点に過ぎない。とは云え三十八年となれば、それなりの感慨を抱くのは当然だろう。

その気持を一言で述べれば、ホツとしたと云うに尽きる。

同窓会では、大学が管理している名簿をもとに同窓生の皆さんに送付しています。

ところが、毎回相当数の封筒が宛先不明で返ってきてします。「最近、同窓会から手紙が来ない」というご友人をご存じの方は、是非連絡先をご一報下さい。よろしくお願ひいたします。

編集後記

今年度は片桐先生、神山先生、柳原先生の3人の先生の退官記事を掲載することとなりました。開学当初からいらした先生は、皆さん退官されたことになります。九期生である私にとっても、なじみ深い先生が大学を去られるのは本当に寂しいことですね。今まで大変お世話になりました。

さて、今年度、同窓会では、1面で紹介した通り、新しい試みに挑戦しました。普段、同窓会室として使っている部屋を飾り付け、飲み物を用意し…。気分は〇年前にタイムスリップしました（と言つても、私はおいしいところ取りでしたが…）。

映画『漂泊』の主人公・秋山さん、アロハダンスサークルの皆様の今後の活躍をお祈りするとともに、自身も「一年一挑戦」くらいのスピードで、前進していくたらと思う今日この頃です。